多文化共生と私の原点

NPO 法人多文化共生マネージャー全国協議会
事務局長　時光（中国）

寒い冬が過ぎ去り、町中が桜の薄紅色に染まる暖かい春がやってまいりました。私は静かに立っている桜の木を眺めながら､「日本で桜の季節を迎えるのは今年で何度目だろうか」とふと考えました。

初めて桜を見たのは、留学生時代に遡り、大学新入生の時のことでした。高校を卒業したばかりの私は、幸か不幸かよくわかりませんが、なぜか日本に来てしまいました｡「自分はこれからどうなっていくのだろうか」と不安感を抱えながらも、WIN コンコード主催の花見会に参加しました｡思い起こせばあれから確かに 10 年が過ぎ､「日本に来てからずいぶんと長い年月が経ったな！」と思ういまだに信じられない気持ちです。来日当初の私は何事も自信が持てず、日本社会に溶け込める日が来るなんて、想像すらできませんでした。信じがたいことに 10 年間経った今、この未熟な私がなぜか NPO 団体の事務局長として、多文化共生の活動に携っています。不思議でなりません。

ところで皆さんは多文化共生という言葉をご存知ですか。人間と自然との共生のための活動ではないかとイメージする人が少なくないでしょう。私は初めて多文化共生という言葉を耳にしたのは、地域国際化協会で勤めている時でした。言葉は聞いたことはありますが、さっぱり理解できませんでした。本格的に多文化共生について勉強し始めたのは、滋賀県にある全国市町村国際文化研修所に採用された後のことでした。多文化共生コーディネーターという職名はいただいたものの、それが何をコーディネートする仕事なのかもわかりませんでした。困ったことに若い自分がいきなり数十人のベテラン公務員の前に立たされ、外国人住民の現状について講義を行う苦しい羽目に陥りました。講義どころか、70 分間日本語で話し続けることすら大きな壁でした。気持ちはあっても、時にはうまく伝えられず、受講者から厳しい指摘や批判をされることもありました。私は全国の研修所で多文化共生コーディネーターとしての仕事をやっていけるのだろうかとうかと思わず内心では疑問を感じていました。　しかし、職場の親切な上司と優しい仲間に救われ、悩みながらも訓練を重ねているうちに、自分の持ち味を出せる講義ができるようになりました。日本語で会話のやり取りすらきちんとできなかった自分が、日本各地でお話をさせていただけるようになったのは、やはり周囲のサポートのおかげだと思います。いつもそばにいる日本人母であったり職場の上司や先輩、仲間など、私のことを大事にしてくださっている多くの恩人の温かいサポートがあってこそ、表舞台に立つ自分がいると思っています。

もう少し多文化共生のお話をしましょう。多文化共生とはいったい何のことでしょうか。平成 22 年末現在、日本には 213 万人以上の外国人住民が暮らしており、地域で外国人住民とどのように向き合っていくかが課題になっています。総務省によると、多文化共生とは国籍や民族などの異なる人々が、互いに文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域の構成員として共に生きていくことを指します。（総務省：2006 多文化共生の推進に関する研究会報告書より）。この定義には主に四つの考えがあります。①国籍や民族の多様性を認める、②異なる文化の承認と尊重、③対等性、④地域社会での参加の主体という意味が込められているように思います。様々なバックグランドを持つ外国人住民は日本で生活をするに当たり、言葉や文化、さらには制度の壁に直面してしまいます。その分野は教育をはじめ、日本語習得、労働、住居、医療保険など、多岐にわたり、更には滞在の長期化によって外国人高齢者が増え、介護の課題も現れています。多文化共生が目指している外国人住民と日本社会との共生を実現するのに、まだまだ多くの努力と長い時間が必要です。

このような状況の中で、平成 21 年に「住民基本台帳に関する一部の法律」が改正されました。平成 24 年 7 月 9 日より外国人住民も住民基本台帳の新たな対象として加わることになりました。今までは問題意識を持たない、あるいは人員、予算が減る厳しい状況の中、どうしても登録者数が少ないことで多文化共生の取り組みを後回しにする行政、地域も存在しましたが、今回の法改正によって、いよいよ行政として外国人住民にも住民サービスを提供していかなければならない状況に変わってきました。法改正に対して、住民サービスの充実よりは管理強化の意味合いが大きいのではないかとの見方もあります。しかし、意識とやる気さえあれば、法改正が外国人住民への住民サービスを充実するためのよいきっかけを提供してくれたという考え方もできるのではないでしょうか。

外国人住民も地域の構成員の一人であり、外国人住民への支援を通して、日本の地域を元気にすることが多文化共生施策の本来の目的です。決して日本人側が一方的に外国人住民を支援することではありません。支援が必要なのは、一部の外国人住民だけです。私たちの周りに日本の社会に貢献している外国人住民も大勢いることにお気づきでしょうか。多文化共生施策は何も外国人住民を特別扱いすることではなく、住民に対して当然のサービスを提供していくだけのことです。しかし、そうは言っても、障害を持つようないわゆる社会的少数者を支援するのと同じ手法で外国人住民への支援をするわけにはいきません。同じ社会的少数者であっても、皆それぞれの特性があり、専門性が違うからです。外国人住民のことに関して言えば、私はこのように思います。その外国人住民はどのようなバックグランドを持っているか、目の前の外国人住民に自立をしてもらうにはどうすればよいだろうか、日本の地域と外国人住民の共存共栄を図るには今、私たちに何ができるだろうか・・・という疑問を持ちながら、外国人住民と向き合っていけば、きっと多文化共生社会の実現にもう一歩近づけるのではないでしょうか。

少し話題を変えますが、普段は恐らく周りの誰もが私のことを中国人として意識していないでしょう。どこの国の人よりも、ただひとりの人間として受け入れていただいているように思います。それでもこの私は外国人住民のひとりなんです。今は日本語で自由に自己表現できているように見えるかもしれません。しかし、ここまで来るのに幾度も転んでは立ち上がり、いろいろな苦い経験がたくさんありました。今の自分も決して十分ではありませんが、あの時、日本語ができず、全く素直に日本社会を心から好きになれなかった私でしたが、10 年間が経った今、周りの温かい愛情とご支援のおかげで、転びながらもやっとスタートラインに立つことができました。周りの日本人や留学生先輩からいただいたものは、単なる温かい支援だけではありません。ひとりの人として、他の人や地域、更には社会のために果たすべき役割があるのだということを身をもって経験し、学ぶことができました。日々の生活だけではなく、社会はどうあるべきか、その理想に向かって、今の自分に何ができるかを意識できるようになりました。それが自分を鞭撻するためのよい考え方でもあるし、このような自分でも社会に伝えられるメッセージがあるということから大きな喜びを感じています。日本での生活は大変なチャレンジでしたが、かけがえのない出会いと学びを収穫できました。「日本に来てよかった、周りの人々に出会えてよかった、人は温かいものだ」と心から思うようになりました。周りからいただいたご恩は返すことのできないものだと思います。今、自分にできることは何だろうと自分に問うてみれば、それは「まずひとりの人としてしっかり生きていき、更には日本社会を愛するひとりの外国人住民として外国人住民と日本社会をつなげていくこと」で

はないかと思います。そう思わせてくれたのは、やはり周りの人々の優しさだと思います。言ってみれば、多文化共生の活動を続けていられる私の原点は、私を大切にしてくださっている日本人への感謝の中にあります。

3月11日に発生した東日本大震災以降、地域の課題がさらに増えている厳しい現状の中、多文化共生社会は決して綺麗ごとでは済まされません。しかし、多文化共生社会の実現は日本社会にも外国人住民にもよいことをもたらすに違いありません。多文化共生社会は何も外国人住民だけのことではないのです。今外国人住民が抱えている課題の後ろには日本社会の歪が隠されているように思います。外国人住民のほかに、例えば自閉症の子どもや車椅子を必要とする方、難病を抱える方、高齢者、失業者など、様々な個性を持ついわゆる社会的少数者の住民がいます。様々なちがいを超え、ひとりひとりの個性が生かされ、寛容であるやさしい社会が多文化共生社会の真の狙いです。豊かな個性が尊重される多文化共生社会の実現は理想のように思えるかもしれません。しかし、理想を持つことは素晴らしいことです。その理想に向かって、少しでも近づいていく努力をすることが大事だと思いませんか。

この文章をご覧になったあなたもぜひ家族、友人に外国人住民のことや多文化共生の考えをお話いただければ幸いです。そうすればひとりひとりにとって暮らしやすく、やさしい社会にもう一歩近づけるのでしょう。私はこれからも日本と母国のことを胸に、明るく頑張っていきます。今後ともご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

「正義」

ビショップ・ファニー（フランス）

和歌山大学に出席している授業の中では、英会話という英語の会話の授業があります。この授業のため、『これからの「正義」の話をしよう　いまを生き延びるための哲学』という本を読んでいます。この本はアメリカにあるハーバード大学の哲学の先生のマイケル・サンデルが書きました。私は高校生の時、哲学を勉強しましたが、哲学の先生の教え方が嫌いでしたから、哲学に興味がどんどんなくなりました。しかし、マイケル・サンデルの本を読み始めてから、哲学を勉強するのはとても面白い場合があるのがわかりました。この本が面白いと思う理由は何か、説明したいと思います。

本のテーマは正義です。言うまでもなく、私たちの社会では正義が重要な観念です。しかし、正義とは何か、詳しく言えるでしょうか。正義がある社会を作ることができるのでしょうか。サンデルの本ではそういう質問が出ます。正義について考えた哲学者は何人もいますが、正義について意見を持っている哲学者ではない人も多いはずです。それは、生活で正しい選択をするのに大切な観念であるからだと思います。それに、正義は社会で住んでいる人の全員に関することです。

一般的に、哲学の本は読みにくくて、哲学に強い興味がない人に面白くないです。この本は違います。有名なハーバード大学の学生だけではなく、普通の大学の学生でも読める本です。実際は、正義のことについて考えたい人のだれでも読めると思います。サンデルは哲学者の意見を説明したり、比較したりするのに色々な例を使いますから、読みやすくなります。アメリカ人ですから、よくアメリカであった事件から例を作りますが、アメリカ人以外の人もわかると思います。わたしは、この本の特に好きなポイントは、意見を紹介する仕方です。というのは、作者は哲学者の意見を紹介して、意見を全部比べても、だれが一番正しいかを読み手にあまり言いません。それは、自分で自分の意見を作らなければならないからです。正義は複雑なテーマですから、一つの意見が正しいとは言えません。各意見の論拠の弱点と長所を見つけることだけができます。この本は正義について、考え方とアイデアを述べます。読み手を考えさせるための本です。

私が高校生の時、哲学が嫌いになったのは先生が学生たちに考えさせなかったことでした。偉い哲学者の意見を聞いたり、わかったりさせましたが、自分達の意見を全然聞きませんでした。けれども、考えるのが哲学の勉強の一番大切なことだと思いませんか。

最初はこの本を読みたくなかったんですが、授業のために読み始めました。まだ途中ですが、真に面白い本です。ちょっと値段が高いと思いますが、議論が好きな人や正義について、もっと考えたい人などにおすすめの本です。

花王見学から考える Made in Japan

張　楠（中　国）

私の留学生活がとても楽しく過ごせているのは、私が学んでいる和歌山大学や留学生を長い間支援してくれている Win コンコードなどの組織があるからです。春、夏、秋、冬に様々なイベントが開催され、私たちはこれらのイベントに参加することで日本の生活習慣や文化などに触れることができ、多くのことを学ぶことができます。和歌山での私の留学のすべての思い出が作られています。和歌山に来て本当によかったと思います。

2011 年 10 月 23 日 Win コンコードの行事で私たちは花王和歌山工場を見学することができました。花王は日本を代表する日用品メーカーです。ビューティケア事業、ヒューマンヘルスケア事業、ファブリック＆ホームケア事業、ケミカル事業の 4 事業があり、多くの製品がここ、和歌山工場で製造されています。お客様の信頼と安心に応える高品質な製品を生み出す生産ラインを見たときに、これが Made in Japan だと強く感じました。工場には人がすくなく、液体や粉末など、どんな中身のものでもこぼさず、素早く容器に入れ、検量、包装し、倉庫まで運ばれ、すべて順調に進んでいる現場を見て本当に感銘を受けました。製品は高品質であるうえ、さらにきめ細かいサービスを提供することを怠らずに使いやすさを保証し続けてきました。

企業は社会に必要とされることによって、長く生きていられます。花王は社会のためによきモノづくりを目指して、多くの活動にとり組んでいます。原材料を選ぶことから、製品を作って、運んで、ゴミに出すまでの、すべてのところで環境への負担を減らす努力をしています。石鹸や洗剤の原材料であるヤシが育つ熱帯雨林には、さまざまな動植物が住んでいます。花王はそうした生物のことも考えながら、原材料を選んで製品を作っています。花王は製品を作る時に出るプラスチックのきれはしなどを資源として再利用したり、ゴミを燃料に使ったりすることで、工場から出るごみをゼロにしようという活動を進めています。より多くの製品をより少ない CO_2 で運んでいます。例えば、トラックに貨物を積むときに使う台であるパレットをなくし、積める量を約 30%アップすることで、トラックの運行を 1 年で約 1300 台分 CO_2 の量にして約 250 トンを減らしています。さらに、CO_2 の出る量を抑えられる船の利用も進めています。製品機能をアップすると容器サイズも使う水も電気もダウンします。花王はこのようなことを考えて製品開発を進めています。身近なエコとして、つめかえ・付け替え用製品で捨てるときのごみを減らすとともに容器の材料も減らすなど、消費者の協力を得て地球環境を守っています。

世界では Made in Japan　は品質の保証でもアフターサービスの保証でもよく知られています。このようなものづくりを支える日本はどんな国なの？日本へ来て 5 年弱の間、生活をしている中で、私は細やかなサービス、商品の使いやすさ、人の謙虚さなど多くの素敵な体験をすることができました。これらのことを 5 年間も感じている私は今どうしてもやりたいことがあります。それは世界のもっと多くの人にこのような細やかなサービスを提供し、使いやすい商品を使ってもらうことです。このような日本のものづくりをもっと世の中の人々に広げていくべきではないかと思うのです。

出会いは人生における何物にも代えがたい財産です。日本へきて多くの出会いによって私は自分のやりたいことを見つけました。本当にうれしいです。かといっても私は夢がかなえる方法を知っているわけではありません。今行っている就職活動には悩みも迷いもたくさんあります。しかし、目の前にあるものに全力を注いで生きていることと夢がかなえられることとつながっていると信じています。現在多くの日本企業はアジアに進出しています。私は今までの留学経験のすべてを使って日本とアジアとの架け橋になりたい。何年後かには日本流のサービス、日本のモノづくりもアジアでよく見られようになり、そして今発展している中国やマレーシアなど多くのアジアの国々でも使いやすい商品を購入することや、きめ細かいサービスを受けることができると私は信じています。

ラオスの教育と現状

ドウアンピラー　プッタワン（ラオス）

ラオスにおける学校教育は，就学前教育（幼稚園など），初等教育（小学校），中等教育（中学校・高校），高等教育（大学など）の 4 段階に分かれる。小学校 5 年，中学校 3 年，高校 4 年の 5･3･4 制をとっており，大学は専門により 2~7 年の幅がある。

該当年齢は就学前教育の保育園が0-2歳，幼稚園が3-5歳，初等教育が6-10歳，中等教育が11-16歳，高等教育が16歳以上である。後期中等教育が4年となったのは 2009年度からであり、2015年までに現在の義務教育である初級教育（5年）に前期中等教育（3年）を加えて義務化する目標が掲げられている。政府は現在でも初等教育の発展に高い優先順位をおいている。しかし、現場では格差がみられるのが現状だ、小学校入学年齢は6歳と前述したが、必ずしも6歳で入学するわけではない。地方の農村地帯はもちろん、首都ビェンチャンのいくつかの地域でも仮に6歳とみなされてもさまざまな原因で入学できない子供がいる。北のほうにあるシェンクワーン県の小学校では、11歳で2年生、14歳で5年生の子供が何人かおり、朝会で背の順に並ぶと非常に目立っていた。理由は、親に代わって家で幼い弟妹の面倒をみていたため入学できなかったのである。学校に行きたくても、近くに小学校がないという事情もある。ラオスの山岳地帯では山を越えて通学せざるを得ない村もある。自転車で通う生徒もいるが、買う余裕のない子供は1時間ほど徒歩で通学する。子供たちの中には、体力が備わるまで入学するのをためらったり、入学しても通学の困難さから学校に疎遠になる者がいる。

ラオスは様々な教育の問題を抱えており，それを解決するには長い時間をかけて一つ一つ問題と向き合っていかなければならない。特に多民族国家であるラオスでは都市と地方の初等教育の格差が激しいことに着目し，都市と地方の小学校について，その現状を以下に述べたいと思っている。

生徒数が多く，4年生は古い竹作りの校舎で授業を受けている。教員は1クラスに1人付いており，完全校である。小学校の隣には中学校の建物が隣接していた。教科書は1人の生徒につきラオス語，算数，理科社会の合科の3冊ずつ持っている。図書室はなく，教室にも本は一冊もない。恵まれた教育環境にはあるが，子どもが教科書以外の本に触れる機会が少ないと感じる。

ある女性の教員は自分の子どもを片手に抱えながら授業を行ったこともある。他に代わる教員がいないため，十分に育児休暇も取れない状況にある。校舎には図書室もトイレも設置されていない。しかし，地方では珍しく就学前教育を行っている。４年生を教える教員の月給を聞いたところ，50000kip（約５ＵＳＤ）であった。低所得だが，他に働き口もなく，村民に頼りにされているため教員の職を離れられない。小学校を卒業したのみの学歴を持つ教員が多い。地方の村全体の経済水準が低く，教育のために経済的な負担ができないようだ。子育てをしながら授業を行うというのは日本社会では考えられないことである。そのような教員には育児休暇を設け，せめて代わりの教員を雇うぐらいの経済力が地域にあればいいのだが，現実的には難しいのであろう。

また，ビエンチャンから離れた地方と経済水準は変わらないにも関わらず，ＮＧＯの支援がほとんど入ってきていなかった。ＮＧＯや海外政府は都市部から遠く離れた地域に目が行きがちで，その間の地域は支援の死角になっている。政府による村の状況調査は難しく，その県や郡の教育局が直接ＮＧＯに支援を申請しなければ，支援は始まらないという状況である。多くのＮＧＯや海外政府の支援に頼っているラオスにおいて，自国の情報を詳細に収集することが求められる。

小学校の若い教員に「なぜ教員になりたいのか？」と聞くと「ラオスには教員が足りない。学校に行ける子どもも少ない。国の発展のために少しでも多くの子どもに勉強を教えたい。」という回答がほとんどである。彼らは毎週1回遠く離れたビエンチャン市内にある教員養成学校に通い，訓練を受けている。

ある中学校は校舎が元病院だったため，学校用の作りになっておらず，それぞれの学年にかろうじて教室を用意しているだけである。より専門的なことを学ばなければならない中学校においては設備が不足しすぎている。もちろん図書館や音楽室はない。学校建設の必要性を感じた。また，本来は専門科目のみを教えるはずの中学校教員が，教員不足のため，全ての教科を教えなければならず教える内容の限界となる。教員になるために教員養成学校に通う学生は多いが，都市部に留まり地方には帰ってこない者も多い。地方の教員不足はラオス全体の教育水準の底上げに不可欠であり，早急に整備しなければならない課題である。

地方の小学校の内，高学年に上がれる生徒は少

なく，その理由としては成長に伴い，家庭での労働力となるため，親が学校には行かせず家で仕事をする。特に雨季は農業の季節なので，学校に来る生徒が減る。また、学校まで遠くて通えない生徒が多い。雨季には通れそうにない道が続き，生徒は通学を諦めてしまうようだ。

私は学校建設現場で遊んでいた子どもに挨拶をしたが，都市部の子どものように挨拶を返すことなくじっとこちらの様子を覗っていた。髪も洋服も汚れており，下着も着けていない。中には裸の子どもがいた。村は日用品のような基本的なマテリアルさえ揃えられない経済状況にある。もちろん子ども達は学校で使う教科書やノートを持っていない。毎週金曜に教員が会議を開くようだが，基本的な解決のために何を話し合っているのか疑問を持ってしまう。生活に必要な最低限の物もない村において，教育に力を入れることは非常に困難である。まずは経済水準を上げることから考える必要があるだろう。

以上、ラオスにおける教育の問題点を述べた。それぞれの小学校にハード，ソフト面両方の問題が多くあることを現実として確かめることができる。始めに書いたラオスの教育政策は国民の教育に反映しているのか疑ってしまう。特に深刻な問題として，

①学校に十分な設備が行き届いていないこと

②教員の不足，教員としての能力の欠如

③生徒の進級と通学が困難なこと

④家庭の経済水準が低く，子どもに十分な教育を受けさせてあげられないこと、

の4点が考えられる。他にも民族間の教育格差などが問題となっているが，フィールドワークでは確認することができない問題だったのである。

この4点について考察していきたいと思う。

①ラオスの学校ではまだまだ教材が足りていないことを感じた。校舎を建設すれば，次のハードの問題として教科書の不足が挙げられる。特に地方の小学校では家庭に教科書を買う経済的余裕さえないため，何人かで一緒に見るか，まったく教科書を使わずに授業を行っている。社会主義国ということもあり，教科書は政府の印刷局しか発行することができない。民間の出版社もほとんど存在せず，国際ＮＧＯや国際機関の支援に頼らざるをえない状況である。

様々な国際協力機関が教科書支援を行っているが，ラオス政府が各小学校に配布できるのが最もラオスのためにはよい。（国自体に予算が不足しているため，現段階では不可能ではあるが。）スクールクラスターを利用し，本を地域で共有することが今後も重要な教材源になっていくであろう。しかし，国にばかり頼るのではなく，学校自身の努力が直接的に教育に反映する。あるラオス国内の小学校では教員が様々なＮＧＯに呼びかけて本を集め，本棚も自分たちで作って本を保管している。少しでも多くの知識を子どもに吸収してもらいたいという教員の思いが多くの国際協力機関の支援に繋がっている。政府に頼れない状況の中で，教員や保護者の自発的な取り組みが教育状況の改善に結びつく。小学校に教材の重要性を気づかせ，学校自身もそれに応えていく相互努力が必要であろう。

②教員の不足については殆どが地方の小学校である。ある小学校では幼い子供を片手に授業を行っていた。そのような小学校は他にもたくさんあるだろう。育児休暇を取れるようだが，代わりに授業ができる教員がいないためやむを得ず授業をしている。このような状況を打開するために教員の増加，教育制度の整備を地域ごとで行っていくことが重要になる。給料も地域でのばらつきがあるため、ラオス人にとって教員はいい職業とは言いがたいのが現状である。職業として社会的に認められるためには、整った設備の下で安定した収入が得られるような環境作りが最優先課題となる。

③南地方のサラワン県、生徒の通学が困難なことである。国道を外れた道なき道の果てに小学校がある。これでは体の小さな子供は通えるはずがない。交通の整備、スクールバスを用意するなど、インフラの整備も課題が多い。インフラのようなハードの側面は他国や、NGOの支援が求められる。

④経済状況が悪くても、学校に行って勉強すれば子供に明るい未来が待っていることがわかれば、親もなんとかして学校に行かせるだろう。しかし、ラオスには学校を卒業した後の子供の受け皿がない。そのことを親は知っているため学校は何の役にも立たないと思ってしまうという根の深い問題でもある。米や野菜で教員の給料を払うのにも問題がある。きちんとした賃金を払える政府の財政改善はもちろん誰もが望むことだが、支援で教員の給料を払うことはできない。

支援とは何なのか、本当にラオスのためになるのかと考えさせられた。

新留学生紹介

宋　姬萍(中国)

私は宋姬萍と申します。２２歳です。山東省済南市の出身です。山東師範大学の交換留学生として、和歌山大学に来ました。心からうれしく思います。

済南より和歌山市は静かで、明るくて、快適な感じがあります。ただそんな感じが私の心を奪っています。このような環境で一年の生活を過ごすことをほんとうに楽しみにしています。先輩たちや日本のお母さんやお父さんたちが、私たちのことにとても関心をもってくれています。これからもいろいろお世話になることと思いますが、宜しくお願い致します。

この一年間いろいろなことをしたいです、でももっとも重要なことは自分の成長です。

日本語会話のレベルが一層上がることはもちろんですが、性格を鍛えることも必要です。ここで一人生活するので独立性と自主性を持たなければなりません。今自分の日本語はまだまだです。学ぶべきところがたくさんあります。これから一生懸命勉強して、がんばります。

ミミ（ラオス）

WIN コンコードの皆さん、初めましてラオス人民民主共和国から参りましたミミ(ティップ)と申します。来日して５年目です。東京で１年間日本語を学び、それから、北海道にある函館工業高等専門学校（高専）で３年間専門分野や北海道の文化･習慣･伝統を学ぶことができました。そして、平成24年度の4月から和歌山大学のシステム工学部情報通信学科の３年次に編入学しました。

趣味は写真を撮ることや音楽を聴くことです。人とお話しするのは苦手ですが、たくさんの人と出会い、国際交流やボランティア活動に参加するのが好きです。さらに、ラオスと日本との科学技術面での国際交流の推進に力を尽くすことで、両国の交流の掛け橋になりたいと強く願っています。よろしくお願いします。

クン(ラオス)

WIN コンコードの皆様、初めましてラオスから参りましたクンと申します。来日して５年目になります。東京で日本語を学び、それから、高知工業高等専門学校の３年次に編入し、3 年間で専門分野や高知県の文化・習慣・伝統を学ぶことができました。そして、今年の４月から和歌山大学

のシステム工学部の３年次に編入学しました。趣味はサッカーです。

大学編入後、勉強はもちろんですが、色々な人々と出会い、様々な国際交流やボランティア活動に参加できることも望みます。さらに、ラオスと日本との科学技術面での国際交流の推進に力を尽くすことで、両国の交流の掛け橋になりたいと強く願っています。これからもよろしくお願いいたします。

呉　衛麗（中国）

日本に着いてから、もう２週間経ちました。短い間でしたが、私の心はいい思い出でいっぱいです。

私は呉衛麗と申します。浙江師範大学日本語学科の三年生です。上海の空港で飛行機に乗って、およそ１時間４０分ぐらいで日本の関西空港につきました。その時、日本は中国に近いという実感がやっと湧いてきました。暴風で飛行機が遅れたせいで日本に着いた時はもう夜の１２時ぐらいでした。どこへ行けばいいのかわからない私たちを助けてくれたのは空港のあるスタッフさんでした。彼女は私たちのために、タクシーを捕まえにいったり、ホテルを探してくれたりしたのですが、最後にタクシーやホテルが全部だめだとわかったとき、私たちにひたすら謝りました。その後、私たちを４階までつれていって、寝心地のいいベンチを見つけてくれました。確かに、最初の夜はいろいろと苦労しましたけれど、苦労していると思わないぐらい日本人の優しさに感動しました。

その日から私たちはいろんな人とことに感動し続けています。会館の優しい先輩たちは新入生の私たちのことを実に親切に扱ってくれました。性能の非常にいい自転車も貰いましたし、花見にも連れて行ってもらいました。和歌山城で、満開の桜を満喫して、満足な気分でいっぱいでした。

せっかく日本に来たのですから、これからの一年間をよく活用して、楽しく有意義に過ごしていきたいと思っています。積極的に日本の方と接触し、いろんな所へ旅行することを通して、日本の独特な文化を十分に味わいたいです。もちろん、遊ぶことだけではなくて、日本語の能力も高めなければいけません。

私は日本で頑張ります！

グェ・ティ・チャム・アイ（ベトナム）

私はベトナムのホーチミン市師範大学から来たグェン・ティ・チャム・アインと言います。和歌山大学の教育学部に属していて、去年の１０月に交換留学生として来日しました。もう半年になりました。毎日の生活は息切れするほど忙しいです。朝学校に行き、夜になると、バイト先に向いたりして、日々があっという間に過ぎてしまいます。だからといって、つまらない生活ではありません。学校であった友達と一緒に勉強することも出来るし、バイト先で毎日来られるお客さんとも会えるし、それにいろいろな面白い活動に参加できるし、楽しんで留学生活を送っている気がします。それだけではなく、いつも学校のボランティア教師とＷＩＮＣＯＮＣＯＲＤの方々のお世話になり、勉強上も日常生活上も応援していただいております。留学したきっかけで、たくさんの人々と出会えて、助けてもらえて、心から感謝の気持ちを伝えたいです。日本とはいつまでも会えますが、今回りにいてくれる人達とは会えるとは言えないので、もっと大切にしたくなります。その人達の存在のおかげで、日本の生活は本当に幸せな宝のようだと思います。いつもありがとうございます。

劉　洋（中国）

東北財経大学からまいりました。劉洋と申します。日本に来たのは初めてですが、いろいろな人に助けられて、困ることなく、感謝の気持ちをもちながら、楽しんですごしてきました。

４月８日、皆さんと一緒に和歌山城でお花見をしました。桜の花びらは風の中で漂っていました。本物の花吹雪をこの目でみて、わたしはその美しさに魅了されました。留学生みんなでお弁当を食べたり、ゲームをしたりして、いい思い出を作り

ました。新しい友達ができて、何よりです。いまは皆さんとの友情を一番大切にしたいです。

せっかく日本に来たので、何事にも挑戦したいです。困難があっても、あきらめなければ、きっとできると信じております。いまの私は、「日本に来てよかった」と感じています。しかし、この一歩を出ないと、本当の日本を理解することができないです。今後も、和歌山に限らず、日本の各地に行って、新しい発見をするつもりです。これからもよろしくお願いします。

さらば、この一年

王　子怡（中国）

帰国して家族に会えると、きっと「日本はどうだった？」と聞かれるでしょう。それには「色々あったけど、一年前よりずっと成長した」と答えてあげようと思っています。

去年の 10 月 2 日に和歌山に来て、帰国するまでちょうど 11 ケ月間の留学生活は充実していて楽しかったです。一緒に日本に来たクラスメートの中で一番幸せだと思うが、それはすべて和歌山の方々のおかげです。何故かというと、ここまで色々と助けて下さる方々がいらっしゃらないと、私は心配せずに勉強したり遊んだりすることがどうしてもできなかったと思います。

和歌山に来て初めて勉強がこんなに楽しいことだと知りました。初めて旅行で視野を広めることを知りました。初めて祭りに参加することができました。初めてみんなと盛り上がってキャンプすることができました。初めて、私はこんなこともできるのだとビックリしました。初めて、たくさんの人の前でスピーチすることもできました。

もっともっとあります。

バイト先で泣き出すまで怒られ、帰り道で元気いっぱいのヒマワリに励まされたこと。通学道で、お花に水をやっているおばあちゃんに「おはよう、行ってらっしゃい」とちょっと濃い和歌山弁で挨拶されたこと。

秋になると、大通りの両脇に立っている楓がひらりと微かな香りのする葉っぱを落とし、この町を真っ赤にしたこと。

冬の大雪に降られて自転車で帰れないとき、一緒にいたおじいちゃんが「送ってあげようか」と声をかけてくれたこと。

コスモス満開の学校の裏坂道、密かに咲き誇っていた和歌山城のアジサイ、靴をはかないとちょっと痛くなる和歌浦のビーチ、ずっと登ると海も見える東照宮の本社、一瞬で消えても心を動かすマリーナシティのミュージック花火…どれも素敵な思い出で、私の一生の宝物なのです。

神社でいつも末吉を引く私は、今年今まで人生最大のユメを実現しました。4 月に東京に行って、アイドルの高乃麗さんの出演するライブを見に行ってきました。小学校五年の頃、「サクラ大戦」というパソコンゲームをやり始め、日本語の勉強もあの時から始めました。高乃麗さんは主人公の一人の声優さんだったのです。「ちゃんと日本語を勉強して、いつか高乃麗さんに会いに行く」と、この十年間ずっと思っていました。これから、まだ迷っているけど、新しい目標を作って頑張っていける気がした。

帰っても止めない」と、この調子で頑張り続けると思います。この一年の間で、もし私の笑顔で少しでも元気になってもらうことが出来れば、それは何よりです。

和歌山、いろいろありがとうございました。では、またいつかお会いしましょう。

キャンプの感想

VU THI THU THAO（ベトナム）

日本には学年中に長期休暇は色々ありますが一番長いのは夏休みなので、精一杯に夏休みを楽しむものです。人によって、夏休みの過し方も違います。旅行したり、ボランチィア活動をやったり、クラブの練習をしたりする人が多いと思います。

つまり、夏は楽しむ季節です。しかし、私にとって、別れの季節です。なぜかというと、学期開講時期が違うからです。ベトナムで学年は９月から５月までです。学年が終わってから留学したり、転校したりする人がいて、特に卒業が近づくとき、夏休みを楽しみにしていながら別れの悲しい感じがします。それに、夏休みといっても塾に行かなければならないので、遊ぶ時間があまりありません。それで、私には夏がいい思い出がほとんどありません。今年はいつもと違います。

ＷＩＮのｓｕｍｍｅｒｃａｍｐ を参加したことで、夏がどんな感じかわかってきました。

残念ながら１泊２日のキャンプへ行くのは本当に大変でした。山道でずっと上がったので気分が悪くなってしまって帰りたいぐらいでしたが、着いたとき来てよかったと思いました。そこでの風景は国のと同じで懐かしかったです。キャンプはずっと雨だったから屋外活動ができませんでした。その代わりに、温泉の初体験ができました。不思議な感じですね！初めてお母さんとの姉さん以外、他の人に裸体が見られるのは恥ずかしかったが雨の日に温泉に入るのはやはり最高でした！

夜、一番楽しみにしていたのはＢＢＱでしたぁ！林業の兄さんたちも、先輩たちも、ＷＩＮのお母さんたちもＢＢＱを焼いてくれてありがとうございました。おいしかったです！

私にとって、そのときのハイライトはレイさんのゲームでした。普通のカードゲームでしたが怖いのは罰ゲームです。負ける人が罰ゲームをやるのはルールです。時間につれて色々な罰ゲームを出ました。やはり、罰ゲームを出る人のほうが怖いですね。罰ゲームで色々な方が巻き込まれてすみませんでした！そのゲームを通じて、知り合いから友達になったり、全然知らない人から知り合いになったりしました。確かに、友達がいなくても大丈夫ですがいるほうが楽しいですよね　*笑*

ＷＩＮのｓｕｍｍｅｒｃａｍｐ を参加したことで、日本にいる間いい思い出がもう一つできました。いっぱい遊んだり、いっぱい休んだりできるようになるのは、全部ＷＩＮの皆さんのおかげでした。

いつも色々なことをお世話になってくれて何よりもありがとうと伝えたいです。

ありがとう！お疲れ様でした！楽しかったです！

この感謝いっぱいの一年

陳　迪（中　国）

去年の４月、この土地に初めて足を踏み入れた時「一人の生活は孤独で難しい」と思っていたのですが、一年経った今の僕は「だからこそ、強くなれる」と思っています。

とは言っても、今まで殆ど体験したことのない一人暮らしは和歌山のおかげで意外と思ったように難しくはありません。和歌山の人は「和」の文字通りに暖かくて優しいのです。和大の先生方も学生達も、WIN のお父さんとお母さんも、ボランティアの先生もアルバイト先の同僚達も皆親切にして下さって、僕は感謝の気持ちを一言では表わしきれません。皆のおかげで、日本語の勉強といい生活能力といい、僕は少しずつ進歩をしていて、ほぼ楽しい毎日を送っています。

思いも寄らず外国人になった僕は、勉強と生活の両立がこんなに難しいこととは思いもしませんでした。しかし、周りの環境が変わったからこそ、僕にも幸せがたくさんあるということに初めて気付きました。本音を言えば、一人暮らしの生活は

時々どうしようもなく淋しさを感じているのですが、和歌山は「我が家」です。先生も先輩も友達もみんな家族なのです。実家を離れていても、僕はここが故郷だと感じています。ここで過ごした一年間で、僕は僕なりの幸せを見つけました。

アルバイトをした最初の二か月、サービス業にあまり慣れていない僕は苦労しました。夜１１時になると、とても眠くなりました。しかし、丁度その時間帯に、殆ど毎日来てくれるお年寄りの夫婦がいました。その夫婦は、買い物した後、必ず「ありがとう」と言って、微笑んでくれました。それは、初めて僕を癒してくれた微笑みでした。深夜０時過ぎバイトが終わって一人で帰る時、たとえどんなに疲れていても寒くても、見上げた夜空の星たちを見たら、お客さんのお礼の一言と笑顔を思い出したら、明日も頑張ろうと元気が出てきます。

日本に来て初めて出会った町は和歌山ですごく良かったと思います。たくさんのことが勉強になり、たくさんのことを知り、たくさんの美しさが目に入り、たくさんの温もりを感じました。心から「ありがとう」と和歌山にお伝えしたいのです。

もしこれからチャンスがあるとするなら、もう一度和歌山に来たいと思います。もう一度優しい人達に会えますように、もう一度美味しいみかんやお寿司を食べられますように。

また会いましょう
何時か、何処かで
忘れる理由ないでしょう
和歌山　is the only one

2011 年度　活動経過

4 月 3 日　新入生歓迎会（和歌山城）
5 月 13 日　WIN コンコードﾆｭｰｽﾚﾀｰ21 号発行
5 月 15 日　第 3 回 NPO 法人 WIN コンコード総会・交流会
5 月 15 日　和歌祭り渡御行列参加
5 月 29 日　県立博物館訪問
6 月 16 日　歌舞伎鑑賞教室
8 月 8 日　紀州ぶんだら踊り
8/27～28　サマーキャンプ（有田川町）
9 月 21 日　慶応義塾大学ワグネルソサエティ男性合唱団
9 月 30 日　会社見学
花王エコラボミュージアムと工場
10 月 2 日　第 20 回留学生の故郷を語る集い
「フィリピンを語る」レイナルド　スガノブ
「ミャンマーを語る」　トウ　ザ　ノエ
後期新入留学生歓迎会
10 月 9 日　万葉薪能鑑賞会
11 月 7 日　第 3 回 WIN コンコードバザー開催
11 月 20 日　大学祭　模擬店協力
12 月 17 日　餅つき（新堀保育園）
12 月 23 日　八朔狩り（紀ノ川市）
鍋パーティー（事務所）
1/1～3　お正月（ﾎｽﾄﾌｧﾐﾘｰ）
3 月 18 日　卒業パーティー

年　間
住宅紹介・入居・転居の支援
生活用品の貸与、生活情報提供
ホストファミリープログラム
就職活動に向けた勉強会

年間を通して週 3 回実施・本年度は院 2 年生　3 名、院 1 年生　2 名、学部 4 年生　1 名、学部 3 年生　3 名合計 9 名が参加

☆　ネットワークの構築　☆
ホームページをリニューアルしました。
ホームページ：
http://www.win-concord.jp
E-メール：
ryugakusei@win-concord.jp

多くの留学生が卒業後も和歌山への里帰りやメール等で連絡があり、いろいろな形で交流が続いています。

CONCORD
WIN
コンコード

adidas
EVER
LASTING
SUMMER

韓国
150円